

# 日本結核病学会北陸支部学会

## —— 第78回総会演説抄録 ——

平成23年6月11・12日 於 新潟ユニゾンプラザ（新潟市）

（第67回日本呼吸器学会  
第53回日本呼吸器内視鏡学会 と合同開催  
第37回日本サルコイドーシス学会）

集会長 鈴木 栄 一（新潟大学医歯学総合病院医科総合診療部）

## —— 一般演題 ——

### 1. 内科からみた肺非結核性抗酸菌症の手術適応と予後

°桑原克弘・梶原大季・大嶋康義・杵渕進一・松本尚也・宮尾浩美・斎藤泰晴・大平徹郎（NHO西新潟中央病呼吸器）渡辺健寛・岡田 英（同呼吸器外）  
肺非結核性抗酸菌症に対する外科治療は治癒切除から難治例の破壊性病変切除による病勢のコントロールに目的が変わってきている。42例の手術例の検討では残存病変は52%に認めたが排菌停止は86%と高率で合併症も膿胸1例のみであった。難治例でも術後は化学療法がしばしば奏功した。破壊性病変をもつ例は化学療法には限界があるため時期を逃さず切除を検討することが内科医にとって重要である。

### 2. 気管支鏡下バルーン拡張術が有用であった結核性気管気管支狭窄の1例

°中積泰人・市川由加里・野村 智・古莊志保・安井正英（金沢市立病呼吸器内）藤村政樹（金沢大医付属病呼吸器内）  
症例は40歳女性。主訴は労作時呼吸困難。結核性胸膜炎、脊椎カリエスの治療を受けた。その後徐々に労作時呼吸困難、湿性咳嗽、喘鳴を認めた。8年後気管気管支狭窄と診断され、ECMO補助下においてバルーン拡張術とダイナミックステント留置、2年後に気管支鏡下バルーン拡張術を施行し、症状は軽快。さらに12年後に再発し、再度気管支鏡下バルーン拡張術を施行し、軽快。気管支鏡下バルーン拡張術は有用な治療法である。

### 3. 健康成人に発症した粟粒結核の1例

°佐藤 昂・

三船大樹・田中淳一・鈴木涼子・坂上拓郎・田島俊児・中山秀章・高田俊範・成田一衛（新潟大院医歯学総合研究）鈴木栄一（同医歯学総合病医科総合診療）田中洋史（新潟県立がんセンター新潟病内）

健康若年成人に発症した粟粒結核の1例を経験した。本症例は糖尿病、透析、HIV感染などの危険因子を認めなかったが、粟粒結核を発症しDICを合併した。DIC合併粟粒結核の予後はきわめて不良であるが、発症から8日目に施行したCT検査により両肺野びまん性粒状影を認め、早期に抗結核薬を開始したことが救命しえた要因と考えられる。重症感染症の原因に、結核が鑑別に挙がることを忘れてはならない。

### 4. 肺組織中から非結核性抗酸菌が検出された慢性過敏性肺臓炎の1例

°梅田幸寛・住田泰之・森川美羽・門脇麻衣子・安斎正樹・飴嶋慎吾・石崎武志（福井大医附属病呼吸器内）佐々木正人（同呼吸器外）今村好章（同病理）  
症例：61歳女性。現病歴：2007年1月から乾性咳嗽あり、2008年7月に前医で間質性肺炎が疑われ当科に紹介。職業：温泉番台。BALF中リンパ球分画63%、CD4/CD8比は14.3。外科的肺生検などの精査の結果、自宅真菌による慢性過敏性肺臓炎（CHP）と右S<sup>2</sup>のMAC症と診断した。CHPのCD4/CD8比は一般に低下するが、MAC症を合併しCD4/CD8比が高値を示したCHPを経験した。